

第 29 回原子力安全専門委員会定例会
(結果概要)

原子力安全対策課

1. 日 時：平成23年10月27日（木） 16時00分～17時00分
2. 場 所：福井県庁10階 総合防災センター
3. 出席者：
専門委員：中川委員長、三島委員、岩崎委員、飯井委員、泉委員、
釜江臨時委員、竹村臨時委員
(同日に委員会を開催しており、両臨時委員にも同席いただいた)
県：岩永課長、前川所長 他

4. 結果概要

資料 1－3、資料 1－4（原子力発電所周辺の環境放射能調査報告の概要）について、主に次の質疑があった。

Q.（資料 1－3 中の）検出濃度範囲というのは何のことを言っているのか。

A. 4 月～9 月に県内の各地点で採取し、測定したものを取り纏めた結果から濃度範囲を示している。これまでこういう形で報告してきたため、(同じ地点の) 経年変化が見られなくて申し訳ないが、臨時環境放射能調査報告（平成 23 年 3～9 月分のとりまとめ）をご覧いただくと、試料ごとの放射能濃度と過去実績がわかるようになっている。
(前川所長)

Q. 陸土については 6 月にセシウム 137 は 140 (Bq/kg) あったということか。

A. そうである。陸土といっても土質によって大きく異なり、粒子が非常に細かいものについては単位重量当たりの表面積が大きくなり、単位重量当たりの濃度としては高くなる。一方、粒径が大きい小石、砂利に近いような陸土のところは単位重量あたりの表面積が小さくなるため濃度としては低くなる。そのため地点間の比較をするのではなく同じポイントの中で濃度を見ている。陸土については元々モニタリングの意味として経年変化を見る、いわゆる（土壌への）蓄積傾向を見るのが目的であるため、そういう形で評価している。特に未耕土で腐葉土が中心になっている土質の地点ではセシウム濃度が高くなる。(前川所長)

A. 臨時環境放射能調査報告（平成 23 年 3～9 月分のとりまとめ）の 30 ページが陸土になっており、例えば、敦賀の発電所北端周辺山土については 5 月が 22 (Bq/kg)、8 月が 21 (Bq/kg) で殆ど変わっていない。同じ地点で取れば大体同じくらいのオーダーで（データが）出てくる。地点間の差は土質によるものである。(岩永課長)

資料 2－2（原子力発電所の運転および建設状況）など、その他については、特に質問、コメントはなかった。

以上